

# セルビア歴史の終わり：日本文化との接触を通して 新しい存在次元を求めて

クリチュコヴィチ・ダリボル

（はじめに）

岡山大学文学部は、平成24年度の岡山大学国際交流基金によってベオグラード大学准教授のダリボル・クリチュコヴィチ (Dalibor Kličковиć) 氏を招聘し、講演会を開催した。クリチュコヴィチ氏は、日本近代文学を専門にしつつ、夏目漱石を通じて禅仏教にも造詣が深く、セルビア随一の日本語の能力（語彙数）からも、若いながらセルビアの日本学の第一人者と言える。クリチュコヴィチ氏の略歴は次の通りである。

生年月日 昭和49年2月27日

## 学歴

平成 5年 6月 ベオグラード・ギムナジウム(高等学校)卒業

平成 5年 10月 ベオグラード大学文学学部入学

平成 9年 7月 ベオグラード大学文学学部卒業

平成18年 4月 ベオグラード大学修士号取得

（修士論文「芥川龍之介の初期小説に置けるインター・テクスチュアリティ」）

平成23年 10月 ベオグラード大学博士号取得(博士論文「夏目漱石と禅」)

## 職歴

平成10年 6月 ベオグラード大学文学学部助手

平成24年 5月 同、准教授

岡山に招聘される機会にクリチュコヴィチ氏が記した経歴は次の通り。

1974年に旧ユーゴ・クロアチア共和国生まれ。旧ユーゴ内戦の戦火に巻き込まれ、セルビア共和国に避難して、難民生活へ。

1993年にセルビア国内の高校を卒業して、セルビア首都ベオグラードの国立大学へ入学しました。本大学の東洋学科において日本語・日本文学を専攻して、1997年に卒業しました。在学中、

セルビア政府の、優等生向けの特別奨学金を授与されました。

対セルビアの国連の経済制裁が解除された時、旧ユーゴ連邦の崩壊後、セルビアの日研生としてはじめての日本への留学を果たしました。日本では一年間早稲田大学に留学して、日本語の習得に集中しました。

1998年に帰国後、母校に戻り、日本語・日本文学専攻課程で助手となり、本格的に日本語教育に携わるようになりました。大学では初・中級の日本語演習、「中級漢字」のほか、「日本文学入門」という科目も、同僚と分担して受け持っています。

2006年に「芥川龍之介の初期小説におけるインター・テクスチュアリティ」をテーマに修士論文を書き、ベオグラード大学の言語・文学学部での発表・審査を通して、文学修士号を取得しました。

博士論文「夏目漱石と禅」は2011年に完成させ、文学博士になりました。論文執筆を機に、ますます禅学への関心を深め、仏教と日本の近代文学の関係、禅の更なる理解を目指して、これからの研究に期待しています。

2009年に、『古事記』のセルビア語訳で応募して、翻訳者の一人として日本翻訳家協会の翻訳特別賞を受賞しました。そのほかにも、芥川龍之介、池澤夏樹、坂口安吾の翻訳もしてきました。

今までは数回にわたり、日本国際交流基金のブダペスト事務所主催の研修会に参加して、外国語としての日本語教育における新しい風潮に関心を持っています。

最近はブカレスト大学で開かれた学会に出席し、夏目漱石と近代日本のアイデンティティーというテーマで発表しました。

様々な分野における逐次通訳の経験も豊富です。在セルビアの日本大使館との交流も活発に行い、大使館主催の国費留学生選考委員会の委員を務めたこともあります。

2010年に、日本の外務省の招きで、東欧諸国の高等教育機関の代表団が筑波大学、東京外国語大学、日本国際交流基金などを訪問し、大学間の交流の現状や展望に関する説明会と話し合いが行われました。ベオグラード大学言語・文学学部の推薦で、訪日の一行に加わり、大学間交流に関する諸問題と課題への理解を深めることができました。

(クリチュコヴィチ氏自筆経歴以上)

岡山大学文学部主催のクリチュコヴィチ氏の講演会は2度開催され、第1回は「家の喪失・世界との和解」と題して、10月29日(月曜日)の18時～19時30分に文学部准教授の鐸木道剛の司会で開催され、第2回は「セルビアにおける日本研究」との題で、10月31日(水曜日)の17時～18時30分と同じく文学部准教授の堤良一の司会で開催された。いずれも場所は、岡山大学まちなかキャンパスの城下ステーションにおいてであった。

クリチュコヴィチ氏は、本人自筆の経歴からもわかるようにクロアチアのセルビア人居住地で生まれ、ボスニア戦争を直に体験している。日本学者としてのクリチュコヴィチ氏の考察は、そういう状況から日本語で思考された言葉として類のないものである。

ここに出版する文章は、第1回の講演会の原稿であり、現実の講演会で話された内容とは多

少異なる。講演会では、参加者が少なかったため、むしろもっとざっくりばらんに状況について話された。あらためて文章によってクリチュコヴィチの思考に沿って考えることは、講演会に参加していなかった人たちにも、同じく家を失った東日本大震災の被災者のひとたちの体験と合わせて、我々の日常生活では忘れがちな世界の現実について考える機会となるであろう。

今また（2013年4月）セルビアはコソヴォを巡って辛い判断を迫られている。プロテスタンティズムが形成した近代がアメリカを先頭にグローバリゼーションとして世界を変えていくなかで、ビザンティン世界という本来プロテスタンティズムと近代の根源の場所に属していたセルビアが、ルネサンス以前の前近代のヨーロッパがアメリカを先頭とする近代と接する場所となっている。それはちょうどアジアにおいて、近代（アメリカ）と前近代（中国）の狭間に立つ日本と、どこか似ている。

（以上、鐸木道剛記）

## 家の喪失・世界との和解

ダリボル・クリチュコヴィチ

現代セルビアの文化について何か積極的な一面をご紹介しようとは思っていましたが、いくら探しても、「現代セルビア文化」という題に該当する話題は一向に浮上してきませんでした。迷っているうちに、お手元にあるドブリツァ・エーリッチ（1936年生）作の『意地のうた』がどこからともなく目の前に浮かび上がってきました。これを手がかりに、多少雑然としていますが、セルビアの精神的な風景の一齣、その中でも私が直接経験した「家」の喪失に関して、お話していきたいと思います。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、ユーゴスラビアという国の崩壊に伴って内戦が勃発した時、戦争責任を問われて痛手を負ったセルビア共和国は1999年にもう一回、今度はコソボの問題をめぐる北大西洋条約機構による空爆を受けました。世界と衝突した、悪玉セルビアのイメージが出来てしまいましたが、かつてのセルビアは外国好きで親切な国と考えられて、評判がよかったです。少なくとも、セルビア人自身は自分のことをそう思っていました。そのように感じていた外国の人も大勢いたらしい。幾つかの例を挙げましょう。

第一次世界大戦でセルビア人がお世話になった、スイス出身の医者であったアルチバルド・ライス（Archibald Rudolph Reiss 1875-1929）という人が亡くなった時、その心臓はライス氏がセルビア軍と一緒に踏破した山の上に葬られたということを知っているセルビア人は多分少ないでしょう。次の例も一昔前のことですが、2002年にフィリピンで亡くなられた在セルビア日本国大使館の大羽圭介公使（1935年生）の遺骨がベオグラード市内の墓地で葬られました。また、2007年に亡くなられたセルビア語文学の翻訳家であった田中一生先生（1935年生）の遺灰がご本人の遺志に従い、セルビアとボスニアの二つの川にまかれました。自国ではなくて、最後の家にセルビアという国を選ばれたこの優れた方々は、広い世界から来て、この狭い家に永遠に居ようというお気持ちになったのは、なぜでしょうか。これはおそらく誰にも分からないことです。こ

の人たちの愛されたセルビアがどこにあるかと考えると、ひょっとしてその心の中にしかなかったのではないかとさえ思うことがあります。

『意地のうた』はもう一つのセルビア、世界との調和が崩れてしまった、心に傷を持つ民族の絶望の叫びと言ってもよいものです。詩の中の敵である「お前」、つまり世界の大国に対して、負けず嫌いの小国がぶつける意地の表れであって、また一種の呪いのようにも聞こえます。キリスト教以前の、言霊信仰に近い、神話の言葉で発せられた呪いです。全面戦争も含めて、世界との激しい対決も辞さない小さな国の現実離れしたプライドという小宇宙の中に閉じ込められている人々は、どのように生きているのでしょうか。いったん戦争が終わってみると、そこで夢を見て、そこから現実に臨んでいく場所としての家は荒れ果てていたという悪夢から覚められないセルビア人の行方を考えるのは私の日ごろの存念です。

「家」といっても、色々な家があります。物心が付いて以来、何となくそこにいるのが当然という場所、知らないうちに、川に放されて所を得ている魚のように、そこで天寿を享受する場所となっているのは、やはり家です。地鎮祭、上棟式、竣工祝いなどの言葉も示すように、その段階ごとに重視される家の建設は、無機質な建造物というより、大事な生き物の誕生に例えられる神秘的な現象でさえあります。我が意を得た家には、難しい言葉を使えば、気韻生動のようなものの感じられる風格が具わっていなければなりません。新しい命を宿す新築家屋は固より、人生の斜陽を地平線に見て取った人が余命を過ごす終の棲家となる、しみりとした家でも、その主人に劣らない個性を持っています。

人の住まいに関しては、私の聊か叙情的な風情と違う基調に基づく名文は、鴨長明の『方丈記』の中にあります。

「たましきの都のうちに、棟を並べ、薨を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々を経て尽きせぬ物なれど、是をまことかと尋ぬれば、昔しありし家はまれなり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家滅びて小家となる。住む人も是に同じ。所もかはらず、人も多かれど、古見し人は二三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。不知、生れ死ぬる人、いつかたより来りて、いつかたへか去る。又不知、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主とすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或は花しほみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。」

個人的な経験もあって、或いはだからこそ、このような「無常観」は、幸か不幸か、私が世界を真剣に考え始めた出発点でもありました。「家」を持つことは、決して当たり前の、誰にも侵害できない権利ではあるまい。ましてや、動物にあるまじき、人間ならではの特権だと思って、安易に住み付いてゴロゴロする場所であってはいけません。「家」というのは、個人なら一生、民族なら、その歴史を通して、ずっと作っていくものです。人間が「家」を造ると同時に、その「家」もまた人間を創るわけです。『方丈記』の引用文も示すように、時間に基づいた人間の記憶ほど不確かなものはありません。時間や歴史を捏造することはできても、「場所」を勝手に操作することはできません。「時間」は空想によっていくらでも書き換えることはできますが、「場所」

は、人間の想像力によって構成される一面もありながら、人の存在がそこに「於いてある」という意味が重い。本来の自己を見ようと思えば、内なる空間と外の空間が絡み合う点が見出せれば、何らかの手がかりになるはずだ。

より広い意味での「家」を、私たちはやはり先祖から授かっています。「父母未生以前」の自分を考えるに当たって、自分が生まれるに至る道歩んできた先祖の魂には、「時間」の中で会うことはもうできないので、「空間」の中から、その息吹を読み取り、ある種の鎮魂を行って、過去・現在・未来へと続く自分の存在を把握しなければなりません。民族にあつては、その最も根源的な「居場所」はやはり神話の中にあります。

日本人には古来から、日本ならではの神話的な世界があり、そこから「家」に関しても独自の発想が生まれてきます。神武天皇の「即位建都の詔」には、日本建国の理念が明記されています。「八紘一宇」という、『方丈記』の無常観と異なる、解釈の微妙な四字熟語が表す高潔な世界観は、天照大神の神勅によって行方と運命を定められた日本人が建てるべき「世界」、道義に満ちた広くて永遠な家を想定しています。もっとも、無常観といっても、不完全な美、束の間の人生など、ありのままの現実を、神道では固より、日本の仏教においても絶対的に肯定する道が尊ばれています。幕末に興った日本の信仰の一つである金光教の教祖は「生きても死んでも、天と地とはわが住家と思えよ」という教訓を遺しました。死後の世界はさておき、現にいる場所は、人間の活動の真の場所だという意味でしょう。もちろん、神話や思想的な理想のままに、人間の心はそう従順に収まりはしませんし、人間のどんなに健全な精神でも、世間の煩雑な慣わしに迷って、大自然の遊びに戦くのは、避けて通れないことです。自然の法則と違う言語を使う神話と、ありのままの現実への志向を両立させるのは容易なことではありません。後にセルビアの文化における神話と現実の問題にも少し触れます。

いくら洗練された技術を駆使しても、どんなに「想定外」を嫌い、もしもの場合を予測しようとしても、人間である限り、不可抗力というものは厳然とあります。私たちの存在を「無」に帰するその不可解な力に出会う「場所」は、やはり自分の「家」以外にないと思います。90年代の旧ユーゴ内戦で難民になって、セルビアに逃げたセルビア人の年寄りも、20年近く経って昔住んでいたクロアチアの村に帰ったケースもあります。自分以外に殆ど誰もいない寂れた村に何故帰ったかという、自分の家で死ぬためだという人が大勢います。私はここで言う「家屋」というのは、何も外にばかりある「空間」だけでなく、内包的に人間の存在を包んで、自己が自己を認識し、自覚して、ひいては自分が自分であることを実感して味わえる「場所」でもあります。

時間や経験の流れに溺れる私たち人間は、自分の意識内容を投影するスクリーンとして場所を何気なく利用したり、どこで何故、何をして、その結果とは何かという事実関係が分かればよいと思ひ込んでいます。その特定の場所無くしては、当時の自分もありえなかったという自覚は殆ど生まれません。自分の存在と意思疎通のある「場所」の探求は芸術家に任されています。神話も、集合的記憶も、また個人的な経験も、「自己」の形成に関わり、その発育に影響を及ぼすものです。その「自己」というものは、直接メスを入れることも出来ず、それを直接に見つめようとした瞬間に隠れてしまいます。しかし、その声に耳を傾けて、それに呼応して、自己が

自己の中に映されるといふ「聖なる行為」に立ち会うことができれば、十分でしょう。神話はその営みの発端に過ぎず、個人としての課題はその生命感を更に表現して充実させていくのです。人間を姿形のない意識に任せるのは、その人間性を希釈して、人の感覚器官の靈妙な力を奪い、人間とその於かかれている場所との感応道交を絶つものと同じことです。自分が現に居る空間に対する臨場感がなくなったら、内なる人間も成り立たなくなります。

さて、セルビア人の運命はどのようなものだったのでしょうか。セルビア人が住んでいる、セルビアという国は昔から、風当たりの強いところに位置するとよく言われます。どの時代にも、大国の利害損得が衝突していたバルカン半島に小国を築き上げて、維持するのは、決して容易なことではありませんでした。日本の方はセルビアのことを、どの程度ご存知でしょうか。日本とセルビアの交流が始まって、今年でちょうど130年になりますので、先月、セルビアの首都ベオグラードで、日本との国交樹立を記念する行事が開催されました。当時のセルビア国王が明治天皇と親書を交わしたのが、交流の始まるきっかけでした。今年には明治天皇が崩御されて100年になる年でもありますから、セルビア・日本双方にとって歴史的な意味があるということで、合同で祝典を行いました。日本側では明治神宮の聖職者と武道場の至誠館の名誉師範が参加されたほか、日本会議経済人同志会の方もいらっしゃいました。これほどまでに民族的な意識が強い日本人に初めてお会いしたような気がしました。明治神宮の神主さんはキリスト教以前のセルビア人の神話に非常に興味を示しました。セルビアの民族的なアイデンティティーを再発見するには不可欠なことだというお話でした。その出会いにも触発されて、少し歴史のお話もしておきます。粗雑で、しかも単純化された歴史観にはなりますが、セルビア人がどのように「家」を喪失したかを、お話する上では、必ずしも無意味なことではないと思います。

セルビア人は民族大移動の時に、他のスラブ系の部族と一緒にその居住地からバルカン半島へと南下していったでしょうが、ばらばらの部族はさらに数百年という長時間を経て、ようやく国家を形成するに至ります。同じ系統の民族、いわゆる南スラブに属するクロアチア人とセルビア人の起源に関しては多くの興味深い仮説もありますが、本来はイラン系の民族でスラブ人と同化したなどとする諸説もありますが、もはや立証できないものです。文字によるスラブ語の最古の表記は紀元9世紀のもので、スラブ人への言及も、6世紀になって初めて史書に登場します。私たちの先祖が住んでいた居住地は今のポーランド辺りの、茫漠たる湿地帯や鬱蒼としている森林に覆われた地域にあったという説も有力ですが、バルカン半島に波のように侵入して来た時、東ローマ帝国（ビザンチン帝国）と接触して、益々衝突する頻度も増えました。その間、土着民族、ユーラシアを縦横無尽に横切って、ビザンチン帝国圏に属していたバルカン半島に出没していた騎馬民族とも戦い、新しく獲得した世界に根を下ろして行ったのです。

9世紀に始まった、セルビア人の最初の国家の形成とキリスト教の受け入れは、決して単純に説明できるプロセスではないので、専門家のすべきお話です。結果としては、紆余曲折を経て、セルビア人は、カトリック教ではなく、後で東方正教として知られるようになるビザンチン教会の権威を認めて、キリスト教に改宗します。こうして、徐々にセルビア人の国家に目鼻

が付いて、新しい宗教は庶民にも少しずつ浸透して行きました。しかし、森林に隠された幽邃の地から来た先祖たちは樹木や岩を崇拜して、そこに宿る妖精を畏れるという民間信仰を捨てたわけではありませんでした。神道の天壤無窮という、世界を宇宙のレベルで把握しようとする発想を持った信仰ではなく、むしろスラブ系の無数の部族もそうであったように、これといった体系もなく、相当粗末なものでした。もっとも、日本の神道でも、最初から普通という宗教というものではなかったのも事実ですが。いずれにしても、歴史の闇から明るみに出るとともに、セルビア人は大蛇や竜の姿にもなる神が住む、古代の薄暗がりの世界から、天にまします、光の神へと、梯子（階梯）を上り始めます。ビザンチン神学は、新プラトン主義と古代ギリシャの論理学などに支えられて、神即ちロゴスの顕現であるキリストを、アーキタイプとして神秘的に真似ることによって、神の本質は分からないにしても、その働きを知ることが出来るという、高度な象徴性に富んだ、中世の霊性の基盤となります。セルビアも、こうした精神文化の一端を担うようになります。

今日でも、セルビアの一般の信者にとって、何か雲を掴むようなお話にしか聞こえない、このようなエリート的な宗教は当時の庶民に理解されようはずもなかったのは、いうまでもないことです。セルビア国家のこの黎明期より、数百年ほど時代が下って14世紀になりますが、ここで振り返らなかった期間中に最盛期を迎えた（1346年には一時的に帝国にまでなっていた）セルビア王国は歴史的な大転機に差し掛かります。常に四面楚歌の状況に置かれていたということもあって、地政学的な要衝の地でありながら、山が多く、寸断されていたバルカン半島では国家の主権と統一を守り抜くのは、至難の業でした。国外の侵略は受けなくても、統合や団結の欠如が著しいセルビア国内で諸侯による群雄割拠の状態は慢性化し、まさに内憂外患のありさまでした。折悪しくオスマン・トルコという強敵が遠方からなだれ込んで来て、1371年の前哨戦で敗北を喫したセルビア王国は衰退の一途を辿り、やがてオスマン大軍の波に呑み込まれていきます。

天下分け目の戦い、いわゆる「コソボの会戦」は1389年の6月15日に起こりました。ドブリツァ・エーリッチの詩『意地のうた』はこの戦いがなければ、決して書かれはしないもの、この壮絶極まる悲壮な出来事を集合的記憶の中から呼び起こそうとしているものです。私の拙い翻訳ではその精神は十分に伝わらないことは百も承知ですが、このような情趣の詩はセルビア以外の国ではなかなか書かれるまいと思って、敢えて訳出してみました。私なりに、その背景を少しご説明してみます。

「集合的記憶」という概念は、とかく引き合いに出され、乱用もされがちなものですが、集合的な約束事であると同時に、ある共同体の奥底に潜む過去の経験を美化して、同じ行動様式を反復することによって望ましい価値観を継承させていくという仕組みで、民族としてのアイデンティティを確立するには格好の手段でもあります。非識字の民衆がコソボの戦いをどのように見ていたかは、もう知る術はありませんから、何らかの集合的記憶が自然と伝わってきたと主張するのは、妥当ではないでしょう。しかし、あたかもこうした記憶があるかのような仕組みを、セルビア人は作り出しました。セルビア人の「家」がどこにあるか、世界との関係はど

うであるべきか、自分とは何かという、民族としての自意識は中世文学によって形作られてきました。

簡単に言いますと、中世以来のセルビア文学には二つの流れがあります。もっとも、截然と切り離す事はできず、むしろ互いに複雑に絡み合っている流れです。そのひとつはセルビア固有の王朝が誕生して、セルビア正教会も13世紀にコンスタンティノーブル総主教庁から独立を得て以降の教会系列の様々なジャンルがあります。列聖された君主への崇敬を教会で執り行われる礼拝の形で表したり、個人的な祈り(私祈祷)、賛歌など、聖職者や為政者の手に成る信仰心溢れる作品が多くあります。著者は聖人の高德をしきりに称賛しながら、自分自身については没我的な表現を使い、この世の無常を嘆いて、神による救済、或いは聖人に神への執り成しを祈ります。セルビアの中世文学は芸術的な自主性を持っておらず、必ず宗教的な機能が前提となっています。ここで大事なのは、聖人への尊敬は必ずしも上から強いられるのではなく、いつの間にか庶民の崇敬の対象となってその地位が確定した人が、教会によっても聖人として認められる例が多いということです。これはつまり、キリスト教以前の神々やかまどの守護神が新しい宗教の聖人に置き換えられて、隠れた形で生き続けたということも意味しています。エーリッチの詩の中に、一家の守護聖人を尊ぶ箇所もありますが、これはセルビア固有の信仰です。先祖代々伝わる特定の聖人が一家ごとに決まっています、正教会のカレンダーの上でその聖人の祭日に当たる日は、その家のお祭りとなっています。親類縁者や友達を招いて、盛大にご馳走をするわけです。それらの聖人はみんなセルビア出身というわけではありませんが、一家を守る聖人である以上は、何となくセルビア人であるかのように感じられてきます。要するに、セルビア人は、ある意味でキリスト教を私有化して、セルビア人=正教徒というアイデンティティーの意識が生まれたぐらいです。従って、セルビアを攻撃する敵は、取りも直さずそのままキリスト教の敵にもなるという理屈ができてしまいます。コソボの戦いでトルコ軍に立ち向かったセルビア王国は、欧州のキリスト教文明を守ろうとしたという使命感まで持つようになりました。

戦後の共産主義体制下で育った世代の宗教的な意識は薄かったです。共産主義の時代が終わった90年代に入ると、多くの人は曲がりなりにも宗教への関心を深めて、先祖以来の伝統を取り戻そうと努めました。しかし、外国は伝統に目覚めたセルビア人を認めてくれるどころか、むしろ独自性を主張する小国を弾劾して断罪しました。その被害者意識こそが、『意地のうた』の真の主人公です。

文学のもう一方の流れは、特に「集合的記憶」を当てにして、それを助長するものです。これはセルビアの叙事詩というもので、セルビア風の騎士道と中世セルビアの騎士の武勇を褒め称える英雄詩はその一部をなしています。ここでは『セルビア帝国の没落』という有名な叙事詩を挙げる必要があります。バルカン半島の諸侯連合軍を率いてコソボの戦いを目前に控えたラザル侯が聖母マリアから言付けを受ける場面から始まります。どちらの王国を選ぶか、天国のそれか、それとも、地上の王国なのか、という二者択一を迫られる筋となっています。この世の栄光を選べば、トルコの大軍には勝てますが、天国はもう保障されません。一方、この世の王



国を捨てれば、戦には負けますが、命と引き換えに、天上の永遠の命と滅びぬ榮譽が約束されます。土壇場で後者を選んだラザル侯をはじめ、参戦したセルビアの貴族が殆ど全滅状態になり、益々弱っていったセルビア王国はもう救いようがありませんでした。このように、キリスト教の文明やその価値観を守るために、数倍も強い敵に立ち向かうセルビア人のイメージ、しかも選民だから、何の未練もなくこの世を捨てて、天国への道を選ぶという美談が出来上がります。この世の価値観よりも、あの世を重視するラザル侯は自由と信仰のために戦う殉教者を越えて、神様に選ばれた民族（選民）であるセルビア人のあらゆる美德を体現する英雄となります。

もともと、叙事詩というジャンルは史実を反映しているわけではなく、むしろそれに都合のよい解釈をほどこし、歴史を自由に書き換えるものです。しかし、500年以上の長きにわたるオスマン帝国の支配下に陥ったセルビア人の心では、こうして現実の空間と時間の他に、神話的な空間と時間も構築されていきます。目下の現実では、セルビアはトルコの隷属国になって、史上初めて国民として自由を失い、屈辱的な状況に置かれました。貴族のエリートの大部分が絶滅し、ラザル侯の娘が父親を殺害した侵略者のスルタンの妻となってしまいました。18歳未満の息子のステファンはスルタンへの臣従（服従）を余儀なくされて、いざという時にトルコ側で戦わざるを得ない運命になりました。一方、過酷な現実と違う、神話的な時間と空間の中では、セルビアの国民はキリストと同様、十字架にかけられて確実に来る復活の日を待つこととなりました。あるいは地上の王国を滅ぼされた殉教者の国民は既にタボル山のキリストのように変容して、天国への昇天を果たしたという言い方もできるかもしれません。このようにして、セルビア人の歴史認識に分裂が生じてしまって、現実を受け入れるより、代替現実を重視するあまり、実際に負けた戦でも、本当は勝利したという破天荒なフィロソフィーが生まれました。要するに、「瓦全」より「玉砕」を選ぶという滅びの美学です。天国の家を得たとしても、民族としてこの世で家を失ったのは、この時が始めてだったのです。ここから出てくるいわゆる「コソボの神話」には非キリスト教的な要素が多く、古来の民俗信仰が色濃く残っているということをお忘れてはなりません。

19世紀に解放されて数百年ぶりに復活したセルビアは、20世紀になると、クロアチア、それからスロベニアと一緒に新しい国を作り、それが第二次世界大戦後のユーゴスラビア社会主義連邦共和国の前身でした。ところが21世紀初頭、セルビアはもう一度あえなくコソボを失ってしまいます。民族的な神話の中心地であり、多くのセルビア正教の教会や修道院（世界文化遺産もある）が建っているコソボは昔からセルビア人の心の家、その文化の発祥の地と言われてきました。セルビア固有の領土でありながら、アルバニア系の住民が圧倒的に多く、その独立要求から火が付いた内紛が続いた末、セルビア側は1999年に米国主導でNATOによる空爆を受けました。その結果、セルビアの警察や軍隊がコソボからの撤退を強いられ、セルビアの主権が否定された、かつての自治州のコソボは国際的に独立を承認されました。

「心の家」と言いながらも、共産主義政権の下で民族的な自意識が押さえ込まれた20世紀のセルビアがコソボの情勢に対する十分な認識を示さなかったのは、二度目の敗北の原因となり

ました。しかも、自らキリスト教文明を守る堅固な城砦を自称して、軍事力のあったセルビアは、20世紀末に至って列強の不興を買ってしまい、喧嘩までした結果、同盟国どころか、1999年に北大西洋条約機構の数知れぬ爆撃機に空を覆われて、海上の軍艦から発射された無数の誘導ミサイルに生活空間を破壊されてしまいました。

『意地のうた』が書かれたのは、その数年前のことですが、住む場所を侵されたセルビア人の被害者意識をよく反映しています。神話と現実が衝突して入り混じり、神に選ばれた筈のセルビア人は、我に返ると、いつの間にか現代文明の異端者になっていました。ここでいう「意地」という言葉は「プライド」「矜持」という意味ですが、損をしても、我を通すというセルビア人ならではのニュアンスもあります。自分のためにならないと承知しつつも、意地だから、それだけの理由で何かやってしまうというのは、自分たちの特徴だと、セルビア人は得意がるようによく言います。もちろん、正しいと思うことを、命を賭してでもやり遂げる覚悟のことなら、むしろ武士道に近い精神かもしれませんが、意地を張って勝ち目のない敵と戦うのは、愚の骨頂です。

詩の作者は、正義や真実の味方である民族が、足かせをかけられ、有刺鉄線を張り巡らした強制収容所に閉じ込められて、自由を奪われた奴隷になったことを苦味に満ちた調子でアピールしています。敵が野蛮な暴力を武器に、何よりも自由と正義を大事にする民族を辱めていると嘆いています。自由と自主性を尊ぶセルビア人であること自体は、そのまま罪だという意識は、欧米型のグローバリゼーションの妥当な批判であると同時に、現実を受け止められない人々の僻みの産物でもあります。こうして、自分のアイデンティティーを維持しながら、健全な個人や社会を築いていくには不可欠な拠り所、つまり「家」というものを、セルビア人は精神的・心理的に失い、また物理的にも蝕まれています。詩の中の家は脅かされながらも、まだ真っ白で美しい自然の中の、こじんまりした理想郷として想像されていますが、世界の風潮に乗り遅れた「セルビア」という実際の「家」はむしろ荒廃を極めています。

これは現在の農村の状況を見ても、一目瞭然です。セルビアでは、農業が経済の基盤をなすばかりでなく、伝統的な価値観に根差した家父長制的な農家が集まる共同体は、母なる国の防衛にも関わってきました。普段農業をやる人々は、いざという時に鋤や鍬の代わりに、武器を手にとって軍人になります。「かまどを守る」というのは、セルビア人が戦争を起こす大義名分で、神、守護聖人と父親という男性的な原則と母性的な存在である国が出会うのはやはり「家」、その中でも「かまど」という場所が重要です。かまどは火を炊いて家を暖めたり、料理を作ったりして、昔の神々や精霊が宿る場所です。農村の過疎化が進み、人気のない寒村が多い今のセルビアは一体、どのような土台の上に将来を築いていくのか、私には謎です。『意地のうた』は自分の一筆の土地に根差した、時として粗野で作法を知らない百姓の根性を讃えています。一見キリスト教の精神に基づいているようでも、教会にはそう頻繁には行かない、自分に対する罪は許さないという、信仰の自由奔放な解釈は見逃せません。自分の世界の中心は「家」であって、その家の中では、外からの干渉なく、自由自在に、気が向くままに暮らしていきたいという生活態度が見えます。もっとも、こうした自由奔放さは今でもセルビア人の重要な特徴の一

つですが、中心がなくなり、遠心力が強く感じられる現在の社会では、これはむしろ危険です。セルビア人という民族が強い父親、或いはそのような権威をほしいままにするリーダー格の人物を常に必要としているというのは、私の勝手な推測ではなさそうです。自由を好むこの民族はその奔放な想像力と「我侪」を管理する指導者を救世主のように今でも待っているとよく指摘されます。

もちろん、セルビアの悲劇は既に90年代初頭、旧ユーゴスラビアという国が崩壊した時から始まり、コソボ紛争の時の空爆はその終幕でした。私自身もセルビア人ですが、クロアチアに生まれて育ちました。国の解体に伴う内戦がクロアチアのセルビア人にとってあまり思わしくない結果に終わり、私の家族も含めて多くの人は数百年前から住み慣れていたクロアチアの故郷を後にして、セルビア各地の避難所に散らばって行きました。これが難民としての、新しい人生の始まりでした。旧ユーゴスラビアの戦争は何故起きたのでしょうか。和気藹々だったはずの隣人同士、同じ会社の同僚、夫婦までがお互いに民族が違うという理由で、相手に不幸をもたらし、大きな不幸ほどそれを喜ぶという人間の心理の恐ろしさに、私は絶句するばかりです。同じ起源を持って、同じ言葉を使うクロアチア人とセルビア人の間の確執とそこから生まれた言語に絶する虐殺の歴史は、何か人間の心の醜くて理不尽な秘密を秘めているような気がしてなりません。その辺の歴史はさておき、1974年生まれの方はユーゴ人として生まれて、セルビア人としての自意識もさほどなしに、クロアチアを自分の祖国だと思って育ちました。しかし、地獄に色々な種類があるとすれば、この世はまさに思い込み地獄です。世界は思い込みや思惑で裁断して、自分にぴったりの背広を仕立てる生地ではないことを、人間はとかく忘れがちです。日本語には「観世音」「観自在菩薩」という言葉があります。人間はその「観自在」になって、世界を観るべきです。当たり前で陳腐な日常の中に不思議な砂金を見出すためです。これも当たりのことの好例のようですが、「家」を持つのは、やはり一つの不思議です。他人の巻貝にも入れるヤドカリの人間でない限り、一度失われた家を二度と見つけられないかもしれない、というのが人間の運命です。それまでの人生と営みをいとも簡単に棒に振って、兄弟同士の戦争を起こしてしまったのも、その「当たり前」に慣れすぎて、その中の「不思議」を観る目がなかったからです。あのころの自分のことを振り返ると、まるで魔法をかけられたようだったと、反省する力のある人は素直に認めます。

内戦の勃発直後、1991年の秋に、私は覚えていない日の忘れていた時刻に家を焼かれてしまいました。一夜にして、着の身着のままの難民になってしまいました。写真一枚も残らずに。他の数多くの人もそうであったように。21年前に「さようなら」も言わずに決別したその故郷に帰ってみたのは、今から3年前のことです。相当強い決心が必要でした。今は無き昔の家は、私が生まれて間もないころ、両親が土地を買って、私を育てながら、作り始めました。一緒に成長していったと言ってもいいですが、私より少し若くもあって、同時に人生の先輩という存在でもありました。将来、私に引き継がせようとした両親も、少しでもお金が貯まると、すぐ増築か何かに使って、完成度の高い、充実した住宅を夢見ていました。過去も未来もまだ想像できない子供だった私にとっては、知らぬ間に自分だけの小さな神話や夢が多く生まれた場所

で、その親しい空間に応じて成長して、空間もまた、まるで私の存在を意識するかのように、息をしていたのです。その原風景が焼失した日に、私は戦場と化した町を既に出ていて、数キロメートル離れたところに避難していました。「家が燃えているらしい」と、親が告げた時には、戦争中だったということもあって、その「事実」の意味が分からず、特に反応しなかったことを、今でも覚えています。その数日後、ペットの犬を車に轢かれてしまった時にはもっと泣いたくらいです。2ヶ月も経たないうちに、私は一人で300キロぐらい離れたセルビアに行って、すぐ高校に、それから大学に入って、日本語を習い始めました。将来のことを思うのでもなく、過去もまた振り返らずに、貧しい難民なりに何気なく生きていたのです。昔、トルコの暴政を逃れて、セルビアからクロアチアへ移住していった先祖たちは、鮭のように元の川に戻る子孫のことを考えていたのでしょうか。

今にして思えば、そう久しぶりに帰るとは、ずいぶん軽率な離れ業でした。かつて我が家があった場所に、クロアチアの政府によって建てられた、赤い煉瓦のままの小さな、得体の知れないイエが建っていました。その周りの光景は惨憺たるもので、こんもりと生い茂る雑草の中から在りし日を思い出させる色々なものは悲しそうに私を見ていました。思い出が葬られた墓地です。昔のままに残っていたのは、桜の一本の木だけです。大きくなったねと、お互いにこの短い無言の挨拶しかできませんでした。家の中へ入ってみると、お墓の中のように冷たかったです。「昔の光は今いずこ」としみじみ思い、身震いました。家の中だけでなく、町を歩いても、私は異邦人でした。警察に行って、外国人として滞在届けを出さなければならなかったのです。戦争の前に、警察高校に通っていたので、夏休みには実習生として実務の勉強のためにその警察署で何日も過ごしたことがあります。しかし、その建物の中では、私は今回一人の外国人でしかなかったのです。誰も自分のことを知りませんし、知っている人でも、そっぽを向いて無視を決め込むばかりです。幽霊のような感じでした。自分の過去の中に、今は誰か別の人が住んでいて、ひょっとして、私が昔その場で存在していたという記憶さえも、錯覚に過ぎないかもしれないと疑いたくなるような経験でした。もう一度帰ってきてよかったと思いつつも、あの時に言いそびれた「さようなら」を言うための一時的な、見納めの帰省でした。

その後、私は二度と自分の家を持つことはありませんでした。なにも、私だけのことではありません。民族全体としても、個人としても、強い自我を支えてくれる頼もしい空間を、セルビア人は喪失したと私は思います。世界の中のセルビアの位置やヨーロッパの中の居場所、自国の領土と国境線さえもがよく分からないのです。現実から締め出されたものは、自分の部屋の中に引きこもっても、妄想が募るばかりです。家は、現実と空想が自然と入り混じる場所であればなりません。外の世界では酷使されるのに対して、内なる空間では自分が主人となって、自由に物を使う立場になります。しかし、これも一方的に利用するのではなくて、自分に任された存在の世話をするという意味です。要するに、物を使いながら、物に使われるということができれば、初めて私と私の環境の調和が成り立つわけです。「随所に主となれば、立つところ皆、真なり」という言葉があります。自分がその場で主人となれば、どこにいても、すべて自分の真の居場所です。自己を無にすることによって生かされようとする態度は、本当の

主人になる道です。自己を自分の住む世界に任せて、外部から優しく物に働きかけると、物にも（つまり世界にも）、感謝の気持ちで人間を再構築していく霊妙な力が出てきます。しかし、現実と想像力を調整できない人には到達できない境地です。

イシドラ・セクリッチ (Isidora Sekulić 1877-1958) という、セルビアの有名な女流作家はこう言いました。「私たちセルビア人は、現実を信じない、しかも現実を嫌っている民族である。現実をまだ知らないうちは、それを夢見っていますが、いったん現実に出会った途端に、それを見くびってしまう。」また、ロシアの19世紀のある外交官はセルビア人をこのように評しました。「セルビア人は想像力に富むが、自惚れている民族である。物事は決してありのままに見ず、実際よりよく、或いは悪く見積もる。戦争の時でも、セルビア人は気分次第である。」セルビア人の中には「コソボ」のコンプレックスがあって、国家有事の際に、いつも同じコソボのパターンを繰り返そうとする衝動に駆られます。そこからは美しい美徳(正義感、勇気、忠節)も生まれますが、罷り間違えば、大変危険な行動様式でもあります。セルビア人は今でも、冗談が好きで、外国人に対しても親切です。しかし、親切の底にはやはり何らかの自惚れとコンプレックスが隠れているような気がします。世界が自分を認めてくれる限り、自分も世界を歓迎しますが、非難されたら、反省はしないで、すぐ角が立ち、激しく自分の潔白を主張します。小さな国ほど、その存続には世界の中の自分と自分の中の世界という認識は必要です。一方的に行動できるのは、無理が罷り通る大国だけです。

民族としてはまだまだ成長しなければなりません。『意地のうた』も示しているように、自分の存在が認められていないと思込んでいる人は、そのコンプレックスにエネルギーを費やして、健全な世界観は持ち得ません。詩としては美しいですが、そこから世界との和解は出てきそうにありません。民族と同じように、個人も想像力に満ちた神話という世界を持つのは、大事なことですが、自分の心、或いは自分の家の中でしか通用しない、自分だけのまじないを、外部の世界も分かってくれるような言語に翻訳する能力もなくてはならないものです。ずっと喪失のお話ですが、「喪失」といっても、白星だけの人生はありえないものです。貴重なものを失えばこそ、得るものもあり、成熟もしていきます。人を包むようにして庇う母性的な「家」に対して、それを守護神である父が守るという基本的な構造は人間に生まれつきのものかもしれません。これを失ってみれば、はじめてその価値が分かりますし、無防備な、素っ裸の人間の姿もその時に見えてきます。ありのままの自分を反省する能力こそ、今のセルビア人に一番必要なものです。これは歴史の経験を生かして将来を目指す新しい教育でしか育てることはできません。経済至上主義が物を言う時代ですが、家族が荒廃して、骨肉相食むという状況がもたらす家庭内暴力と家族間の凶悪犯罪を減らすには、為政者はもっと国民が活動する環境の整備と精神衛生管理に力を注がなければなりません。室内には時々節電を促すこの言葉が書いてあります。「最後に部屋を出る人は電気を消しておいて下さい。」これをもじったジョークがフェイスブックで流行っていました。「最後にセルビアを出る人は電気を消しておいて下さい」と。国勢調査の結果を見ても、セルビアが消えつつある社会であるということは主観的な印象ではなくて、統計数字も示している事実です。私としては、戦争などの深刻な打撃の影響を未だに

克服できず、方向音痴のまま、歴史と空間における自分の居場所を暗中模索している民族の進路を補正するには何をなすべきか、ということを考えざるを得ません。

## **PRKOSNA PESMA** Dobrica Erić

Ja Rab Božji  
Srbin sa prosedom bradom  
izjavljujem dragovoljno  
kroz lance i žicu  
pred svedocima  
silom, mukom i nepravdom  
da sam kriv i da priznajem krivicu!

Kriv sam što sam neko  
a ne niko i netko  
Kriv sam što u doba opšteg srbobrsta  
idem u pravoslavnu crkvu  
doduše poretko  
i što se krstim ovako  
s tri prsta!

Kriv sam što jesam  
a treba da nisam  
Kriv sam odavno  
što stojim uspravno  
i gledam u nebo, umesto u travu  
Kriv sam što se drznuh protiv krivde  
kriv sam što opet slavim svoju krsnu slavu!

Kriv sam što pišem i čitam ćirilicom  
kriv sam što pevam, smejem se i psujem  
a ponekad i lajem  
Kriv sam i priznajem  
da ne znam što znam i da znam što ne znam  
Kriv sam, i da završim  
s najvećom krivicom

(pre nego što se zacnem od smeha)

Kriv sam tvrdoglavac  
što sam Pravoslavac  
i Svetosavac i što ne verujem  
u sveti zločin i oproštaj greha!

Ako to priznam da sačuvam glavu  
izgubiću časni krst i krsnu slavu  
Ako ne priznam crno mi se piše  
ceo svet će na moju Zemlju da kidiše  
Rulje bivših ljudi lopova i golja  
čopori robota i drugih monstruma  
kidisace na moje voćnjake i polja  
i na moju belu kuću pored druma  
oko koje kao najlepče odive  
cvetaju trešnje, jabuke i šljive.

Pa evo  
priznajem i to  
za spas roda  
Ja više ne postojim  
skinite me s'liste  
Ja sam od sad samo  
vazduh, svetlost i voda  
tri elementa koja vam koriste.

A ovo što pred vama govori i hoda  
to je ono što vi od mene stvoriste!  
Moja ružna slika  
ozverena lika  
koju umnožavate u večeri i jutro  
to je slika vaše svesti i podsvesti  
to nisam ja, spolja  
to ste vi - iznutra!

Moj dušmanine sa hiljadu ruku  
s hiljadu slugu i sluškinja laži  
ubrao si mi sunce ko jabuku  
i radost čistu ko bulku u raži.  
Moji će potomci piti jed i čemer  
a tvoji već piju gorku medovinu  
za krvav novac kojim puniš čemer  
rasprodajući moju djedovinu.

Usud će ti ludačku košulju obući  
i tada će se malo razdaniti  
ili će planeta od sramote pući  
i sve nas u isti ambis sahraniti!

Mnogo ste važne  
Zemljo moja mila  
Ti i Tvoje sestre  
Istina i Pravda  
čim se na vas digla ovolika sila  
čim su na vas zinule  
krivda i nepravda.

Rulje bivših ljudi  
ubica i golja  
čopori robota i drugih monstruma  
palacaju na tvoje voćnjake i polja  
i na moju belu kuću pored drumu  
oko koje kao najpleše odive  
cvetaju lipe, jabuke i sljive.

Šta će ovde dzihadlije  
krstaši, farmeri  
koji Ti čereče sinove i kćeri  
Mora da su čule belosvetske bande  
da imaju zlatna srca  
pa ih vade



da ih presade u sopstvene grudi  
ne bi li i oni tako bili ljudi.

Gospodo tužiocu suci i dželati  
ispisali ste mi svoje zapovesti  
po zenicama najfinijem staklu  
Što teže živim, lakše ću umreti.  
Zašli ste mnogo u noć podmaklu  
ali uzalud ćete linčovati  
najgostoljubiviji narod na planeti  
(zbog čega ćete goreti u paklu)  
jer Ljudsko Srce  
čudo nad čudima  
neće da se primi u vašim grudima!

Mi se ne plašimo smrti  
crne vuge  
već ropskog života i bolesti duge  
Smrt je česta pojava medj nama Srbima  
kao što su proleće, leto, jesen, zima.  
I nije strašnije  
pogotovu danju  
od suše, poplave, zemljotresa, mraza  
kad je čovek sretno na svome imanju  
okadjene duše i svetla obraza.

Zlonamernici  
siti i maniti  
sve mi zabraniste u rodjenoj kući  
al ne može mi niko zabraniti  
da pevam i da se smejem umirući  
a to se vama više ne događa  
ni kad svadbujete  
ni kad vam se radja!

Poštedite me koca i konopca

i razapnite me na vrhu planina  
kao vaši praoci što su mog Praoca  
Isusa Hrista Nazarećanina.

Ja cu da gledam  
a vi zažmurite  
inače će vam se oči rasprsnuti  
od sjaja mog lica  
Samo, požurite  
što pre me razapnete  
pre ću vaskrsnuti!

<翻訳>

『意地の詩』

ドブリツァ・エーリッチ作

我、  
神の僕、  
ごま塩ひげの  
セルビア人、  
暴力と苦しみと不正という  
三者の証人の前で、  
足かせと有刺鉄線越しに、  
自由な意思に従い、宣言します：  
我が悪かった、罪状を認めます。

誰でもない者、どこかの何某という誰かでもなく  
我は他ならぬこの我であるからこそ、悪い。  
セルビア人狩りのこの世において  
そう頻繁でないにしても、  
敢えて正教会に通い、  
こうして、三本の指を合わせて、  
十字を切るから、悪い。  
我は我にあらざるはずなのに、  
我はやはり我であるから、悪い。  
真っ直ぐに立ち、

草を見下ろすべきであるのに、空を見上げているのは、  
我の昔からの罪だ。

凶々しくも不正に反旗を翻し、  
守護聖人の名をまた尊ぶのは、やはり我が悪い。

キリル文字で書いたり、読んだりするから悪い、  
歌を歌ったり、  
笑ったり、罵ったりもして、  
時としては吠えたりもするの、やはり悪い。  
すべて我が悪い、故に、我、罪を認めます：  
知っていることは知らない、知らないことは知っている、と。  
悪かったな、けれど、最後に  
最も大きな罪をもって、終わりとしよう。  
(笑いすぎてむせる前に)

一番大きな罪はな、正教徒であり、  
聖サヴァの子孫であるこの頑固者は、  
いわゆる「聖なる犯罪」だからと罪が許されることは  
信じ得ないということだ。

一命を取りとめるために、  
全て我が悪かった、と認めれば、  
尊い十字架と先祖以来の信仰を失う。  
もしも、それを認めない場合には、  
全世界の連中が我が祖国に食ってかかり  
我は、大変な目に遭わされるだろう。  
人でなしの群集、  
盗人と下種の暴徒がやってきて、  
ロボットや他の怪物が群れとなり、  
我の果樹園や畑、  
華麗な女神のごとき花を咲かす桜やりんご、プラムに囲まれた  
道端に建つ真っ白な我が家へと襲いかかってくる。

けれども、  
我が国が滅びないように、  
これもまた認めよう。

我はもう存在しない、  
この世のリストから除名されてもよい。  
以降、我は空気、光、水、  
お前らの使う三元素と化す。  
お前らの前で話したり、歩いたりするものは、  
これはお前らの手によって作り変えられた我だ。

朝晩、お前らが幾枚にも複製する  
我の醜悪な姿、  
獣さながらの我の外貌は、  
お前ら自身の意識と無意識の真の姿だ。  
それは我の顔ではなく、  
まさにお前らの心の中だ。

千の手を持ち、  
お前の謀略に与する千の下男、千の下女を擁する我が敵よ、  
お前は我の太陽を、あたかもりんごのごとくもぎ取り、  
ライ麦畑のポピーの花にも似た清らかな喜びを摘み取ってしまった。  
我の子孫は憤りを感じ、苦汁を舐めざるを得ないのだが、  
祖父譲りの我の土地を売り払い、苦杯を満たす酒手で  
苦い蜂蜜酒を喫しているのはお前の子孫であるのだ。

運命が狂人の着る拘束衣をお前に着せたその時、  
ようやくこの暗闇は少し明けるだろう。  
さもないと、この地球もいよいよ恥に耐えかね破裂して、  
我らは皆、分け隔てなく同じ深淵に葬り去られてしまう。

我が愛おしい祖国よ、  
君の存在は、君の妹たちである「真実」と「正義」とともに、  
よほど大きいとみえて、  
こんなにも強い輩たちが君を滅ぼそうと立ち上がり、  
不公正で不公平な奴らが君を飲み込もうと、ぱっくり口を開いた。

人でなし、  
人殺し、下種の群集、  
ロボットや他の怪物の群れは、

ペロペロと舌を出し、  
君の果樹園や畑を狙い、  
華麗な女神のごとき花を咲かす桜やりんご、プラムに囲まれた  
道端に建つ真っ白な我が家を狙っている。

君の息子たちと娘たちを八つ裂きにする。  
このジハードの戦士、  
十字軍戦士、  
アメリカの輩は  
一体この地で何をしているのか。  
どこの馬の骨とも分からない盗賊が聞きつけたのだろう、  
この国の子供たちには金の心がある、と。  
その心を<sup>えぐ</sup>抉り出して、  
自らの胸に移しかえれば、  
自分たちもやっと人間になれるとでも思っているのか。

検察官、  
裁判官、死刑執行人の皆々方、  
最も繊細なガラスである、我が瞳には、  
お前らの判決が刻まれている。  
けれど、辛い人生ほど、死することもまた楽だ。  
お前らは暗闇にもう深入りしているが  
世界一親切なこの民族を皆殺しにしても、  
（これこそ燃える地獄に落ちる罪だけでも）  
すべて無駄だ。  
奇跡中の奇跡である人間の心というものは、  
お前らの胸に移しても、そううまくは育たない。

真っ黒な鳥の死など  
我らは怖くなんて思わない。  
いや、怖いのは奴隷としての暮らしと治らぬ病。  
我らセルビア人の間では、死も四季の移ろいのように、  
ごく普通のことだ。  
特に、自分の持つ一筆の土地で  
乳香で清められた心と潔白な顔で出会った白昼の死は

かんぼつ  
早魃、洪水、地震や霜なんかより  
つゆほど  
露程も怖くはない。

ひもじさを知らない、身勝手な悪党どもよ、  
我が家とはいえ、お前らは我に全てを禁じたのだな。  
けれど、歌ったり、笑ったりしながら、  
死んでいくのは、我の勝手だ。  
歌ったり笑ったりは、お前らは、  
結婚する時にも、  
子供が生まれた時にも、  
もうしないのだよな。

串刺し刑や絞首刑だけはやめてくれ。  
我を山の上で磔刑にしてくれ。  
お前らの祖たちが、我の祖、  
ナザレのキリストを十字架へ磔にしたように。

我は目を見開くが、  
お前らは目を閉じよ。  
そうしないと、私の顔の眩しさで  
お前らの目は潰れてしまう。  
ただ、早くしろ。  
早く磔にしてくれれば、  
それだけ、我は早く復活するのだから。

(ダリボル・クリチュコヴィチ訳)

#### 本稿の内容に因む最近の動向

以上のお話は、セルビア民族全体が巻き込まれた、歴史の大事件であったコソボの戦い（14世紀）とそれにまつわる神話的な自国歴史観への言及と、これもまた国民全体が巻き込まれましたが、その中の一人である「私」が日本文化との接触を通して考察・再認識した旧ユーゴ内戦の個人的な経験を組み合わせて述べてみたものです。一国が国際社会に持つ位置づけと、世界中の一個人の存在とは決して同次元の現象として扱えないのは言うまでもないことです。しかし、戦争を伴う国の崩壊が故郷と家の喪失につながり、こうした経験への意識を深めていくにしたがい、「自己」の再編成を余儀なくされた私は自分の存在が置かれている空間の再編成にも取り組むと同時に、国名のみあって実際には空洞化した国家というものへの信頼低下、対

外関係の不安定と模索ぶりには、セルビアを覆い尽くして久しい何物かの不気味な息吹を感じています。戦争や制裁などの災難が終わり、もう国が発展と改革の途についたと思いきや、先日物事は国をまた過去へと引きずり込むような展開となってしまいました。今回もまたほかでもなく、常にセルビア人の歴史観・自己同一性の底流にあった「コソボ」の問題がきっかけとなったのです。

米国の率いる国際社会との対立を徹底させて、昔からセルビアの領土であるコソボの独立国家としての国際的な承認につながるNATOによるセルビア空爆を、無条件降伏も同然の停戦協定で終わらせたミロシェビッチ大統領（当時）の政権が崩壊したのも、今や一昔前のことです。民族的なアイデンティティーの中核をなす中世の神話の発祥の地であり、セルビア精神性の揺りかごであり続けたコソボがこうして本土から奪われ、州内においては数でセルビア人の住民を大きく上回るアルバニア系住民の統治権がそのまま認められ、かつてのセルビア内自治州が歴史の皮肉ともいべき暗転で主権国家になってしまいました。

ところが、アルバニア系住民による「実効支配」の実態を認めつつも、領有権が依然セルビア共和国にあり、いずれまた主権回復が可能だという当てにならない期待を、コソボ紛争終結13年後の現在まで捨てきれないセルビア人も居り、セルビアの現政権としても、国民への配慮もあって「コソボを諦めた」と解釈できるような言動は極力避けています。セルビアにとってはEU加盟が死活の問題で一刻も早く達成したい目的だと政権側も強調しているところですが、不可欠な条件の一つとしては「コソボ国家」との関係改善、要するに「独立という事実」の承認を要求されているようです。先日ベルギーのブリュッセルで行われ、決裂に終わったセルビア・コソボの交渉でも、結局はセルビア側が受け入れがたい条件を突きつけられ、強引な合意に調印できなかったという、セルビアのこれまでの歴史で何度も見てきた観点から事の次第が説明されました。しかし、これは複雑極まる政治的な諸問題が絡む、単純化を許さない事案でもありますから、稿を改めて論じるべきです。ここではただ、あくまでも本稿の趣旨に沿って、交渉が難航し、決裂に追い込まれたことと、その経緯を国民に対して説明するに当たり、「合理的な言語の欠乏」にも起因する政権の困惑ぶりについて、もう一度指摘しておきたいだけです。政権側のその当惑は取りも直さず、自らの現在と将来に関しては現実に即した合理的な見方がなかなかできないセルビア人の「脱現実的」な民族性、過去と将来を混同して見分けがつかないその歴史観をも反映しています。

国家の「今」を考える時、セルビア人は過去にさかのぼり、現在では通用しなくなった概念と他国に通じがたい国民感情でもって、自分の立場と世界観を訴えようとする傾向があります。今回のブリュッセルの交渉の際にも、たとえば国民の将来に当然責任を持つセルビア正教会側の言説を見ても、コソボの問題はやはりラザル侯をはじめとする、過去の偉大なる先達を模範に対処していくべきだという昔ながらの主張を固持していることが分かります。これは、セルビアの更なる孤立と貧弱化の危険を冒してでも、貫徹すべき伝統的な路線だということです。古聖たちの示した道を踏み外し、先祖から譲り受けたコソボの聖地を「売却」した「裏切り者」の政治家があれば、その不名誉が集合的記憶に残り、永遠に挽回できないという警告のようにも

聞こえます。歴史的な一步を間違えると、国内の評判が悪くなるのを恐れ、或いはまた売国奴の烙印を押されまいとして、このように実際政治・民族神話・自分たちの思惑の狭間にある為政者は、自主的な責任者として国家の将来に関わる重大な決定をなし得ようはずはありません。EU加盟につながるとの期待があった交渉が失敗した原因を説明するその言葉のいかにもたどたどしく、合理性と自信に欠けていることに、大変不安と不甲斐なさを覚える人も少なくなかったでしょう。

現政権の代表者は現状を認め、きわめて不利な既存条件のもとで国際社会にも通じる「言語」で、可能な限り国益を守りつつ、いかに局面転換を図って見たところで、新しいセルビアが生まれる空間は国内外ともにまだ出来上がっていないらしい。コソボの運命とセルビアの立場の脆弱さを理解できない国内、国が底無しの泥沼に落ち込んでいるような、同盟国のない（これは現首相の最近の言葉）雰囲気が変わらない国外—これは純粹に政治的な問題であると同時に、もう少し哲学的に考えるならば、国民の不安、その無念と無力の原因が専ら他者とのコミュニケーション不全、健全な「家」の無さにあると言えましょう。

水に落ちて、濡れた衣服が脱げないままに身に纏わり付いているため、泳げるはずの人も泳げずに、溺れてしまう時のように、セルビアも昔の神話的な空間を脱して、様々な改革も外国に評価されているようにも見えるのに、国の存亡にかかわる大事な局面ごとに、「過去」の幽霊がまさに毒気ある蒸気のように湧いてきて、より現実に沿った思考を麻痺させてしまいます。もともと、セルビアのすべてが過去・現在、神話・現実などの対立事項で説明できるわけではありません。ところが、過去に拘泥しながら、自国の歴史を理解できず、これからの生活に不安を覚えながら、未来の展望を見極めようとせず、自国の政は自分で取り仕切って干渉は許さないといいつつ、国家への信頼も自分の明日への自信も持てないという矛盾多きセルビア人の民族性はまだ十分に研究されていないと思います。明日へ向けて、或いは他者たる国外に向けて発する「言語」はいまだに発達しておらず、「家」に根差す家父長制的な価値観を主張するものの、領土が縮み、精神的生活の劣化を伴って次世代に受け継がれていくべき価値もなくなり、個人と社会を支えていく新しい価値観も誕生ないまま、危機に直面する度に、反射的に既に無い「過去」に迷い込んでしまうのが、セルビアの現状です。

永遠に過渡的な民族で、その場しのぎの処世術に長けてはいますが、大局的な見方もできませんし、「今」の生き残りに直接役立つ反省もあまりしません。今日さえよければ、明日は何とかなるというような気持ちは危ないバルカン半島に住んできたセルビア人ならではの生き残りのための戦略だったかもしれません。

歴史の荒波に容赦なく揉まれてきたセルビアですが、その中でも特に大事であり、今までに連綿と続いてきた、「コソボの存在」を中心にしたその歴史はもはや終わりを告げていると見てよいでしょう。19世紀以降、アルバニア系住民の分離主義に苦しんだコソボ居住のセルビア人の苦難に満ちた歴史にはここでは触れません。コソボなくしてセルビアの精神文化は考えられぬものですが、その地域の分離独立とセルビア側が止むを得ずそれを認めることにより、セルビア人の心、その民族的自意識がどのような影響を受けるかは更に100年を経てから初め



て考えられるかもしれません。ユーゴスラビア連邦の解体に伴った一連の紛争の末に、中世セルビア王国以来の優越感・自国の歴史への自負とともにコソボへの執着を離れて、諦観を強いられるセルビア人はどのような将来を迎えていくのでしょうか。この点においては、セルビア人が感心を寄せて尊敬している遠い国—日本に学ぶところが多いでしょう。

(2013年5月28日クリチュコヴィチ・ダリボル追記)